■合評会記録　泉谷瞬著『結婚の結節点』

泉谷瞬『結婚の結節点―現代女性文学と中途的ジェンダー分析―』書評

――多和田葉子「犬婿入り」・津村記久子「地下鉄の叙事詩」再読を通して――

福岡弘彬

一　本書の目的、および書評者からの問題提起

泉谷瞬『結婚の結節点―現代女性文学と中途的ジェンダー分析―』（二〇二一・六、和泉書院）は「労働・異性愛主義・生殖という三つの観点を採用し、それらの綿密な注釈と理論的な位置づけを作品における女性表象に照準する」（27－28頁、以下引用の際は頁数のみ記す）研究書である。「本書の最終的な目的」は「婚姻制度を中心として法的に規定された単一的な関係性を保留し、文学作品が示唆するオルタナティブな関係と主体のあり方を具体的に思考すること」（29）と明示される。このとき泉谷は、文学研究という領土に拘る。「本書では社会状況・現象を説明するための「素材」として作品を扱うのではなく、文学研究としての意義を積極的に確立する」（28）、「本書は、文学論として執筆されている」（37）と、作品を文学として読むという構えが強調され、「文学作品を読解することの可能性を、愚直なまでに強く前に出した各章の姿勢」（同）が表明される。

本書で取り上げられる「現代女性文学」には、それを論じる批評や書評は散見されるが、「研究」は――発表後間もないから当然ではあるが――少ない。そうした文学作品が学知の対象になる基盤を作るかのように、著者が謂うところの「文学研究」的方法に則った分析がなされたことが、本書の第一の達成と言えるだろう。「研究」というアプローチによって、作品について語る場所自体を作りあげようとする、開拓者としての泉谷像が浮かび上がる。それは、次に引用する「土壌」という言葉と響き合うものだ。だが、本書から立ち上がる著者のイメージは、西部開拓時代の屈強なフロンティアのようなものではない。「文学研究とジェンダー研究」、どっちつかずかもしれない本書の「中途半端」さこそが、この書のサブタイトルに込められてい

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

るという。

理論や注釈による過度な「武装」と、作家へのつかず離れずといった曖昧な向き合い方が、本当に文学研究の方法として相応しいものであるのか――「文学研究とジェンダー研究、どちらの立場からも中途半端な代物である」といった疑問や困惑を呼び起こす原因になるかもしれない。／しかしあえて挑発的に書くのであれば、「中途的ジェンダー分析」とは、このような否定的な反応も視野に収めたタイトルである。[…] ジェンダー理論をはじめとした複数の学問領域を渡り歩きながら、対象とする作品群に執着の念を寄せること、そうした「中途半端」な姿勢を、否定的な意味ではなく、異なる種類のものを交差させることによって興味深い分析や考察が生まれる土壌として、すなわち不確実であるがゆえの肯定性を最大限に引き出す言葉として副題を設定したつもりである。[…] 厚かましさを承知で言えば、読者がその応じ損ねの箇所を拾い上げ、本書の考察を叩き台に練り直してくれるような期待も、「中途」という言葉には託した。（38－39）

「異なる種類のものを交差させることによって興味深い分析や考察が生まれる土壌」――泉谷はこの書を「文学研究」と「ジェンダー研究」という土の混交によって生まれた新たな実りとする。著者は、読者がその種を「拾い上げ」る＝散種を夢見ている。だが、その欲望は決してファロセントリックなものではない。本書から私たちは、読まれた後に生じるであろう「偶発的な親密性」（313）への願い、つまり、家族的‐ツリー的‐徒弟的な研究共同体とは別の共生的言説が立ち上がることへの欲望を読むこととなる。

右のような姿勢から本書が最終的に導き出すのは、女性に密着している構造、言い換えれば「自然」と化している「結婚」制度を解体することの困難さである。「多様性」や女性の「自立」が言祝がれる現在において、〔ヘテロ〕セクシズムを基底とする「結婚」制度の「強靭さ」（321）は、女性の労働・生殖にまとわりつくゾンビのごときしぶとさを持つ。だが、「多様性」や「自立」が資本の拡大‐増殖のフローと矛盾しない形でのみ認められ再領土化される新自由主義的統治において、今までより一層「家族」による再生産無償労働は不可欠となるのだから、それは当然の帰結でもある。

選択という体裁をとりながらも、「結婚」が誰であっても脳裏をよぎる、すなわち「前提」「自然」とされ続ける現在において、それに常に既に絡め取られている言葉を使うことによって、いかに「密着している構造に「ノー」と言う」（スピヴァク）のか――。敢えて大げさに言えば、それが著者が文学作品を読むことのただなかで探り当てようとする「オルタナティブ」なのであり、そのとき賭けられるのが、「親密性」の概念である。「現

代文学の発揮する想像力とは、このようにして日常性に肯定的な価値づけを行い、既存の観念を解体する。それはつまり、不可視化された関係を露出させ、そこから貪欲に生きる力を得ようとする主体の底力を表示するものであり、本書の目的からすると、その主体が掘り当てた親密性にこそ着目する必然性を述べておきたい」(321)。「結婚」が「自然化」することで見えなくなっている「日常性」の潜勢力を、現代女性文学は抱え込んでいる。私たちの生を囲繞する統治的権力の下で、にっちもさっちも行かない窮屈な「日常」を、様々な人間・動物との「偶発的」な縁を手繰り寄せる力によって、文字通りサバイブすること。新自由主義に動員されながら排除される女性たちの「日常」に、泉谷は文学を通して「偶発的な親密性」の創発という出来事を見出し、そっくりそのまま絶望的状況を生存可能な空間に描き変えようとするのだ。文学作品を通していま・ここで生き延びる技法を考案しようとする本書の試みを、一先ず以上のようにまとめることができよう。

さて、書評者には、「文学研究」と「ジェンダー研究」の二者択一における「中途半端」さという感想は、本書を読んでも生じなかった。たしかに、本文読解の際に解釈に対する禁欲が保たれ、絶えず資料による根拠付けがなされる本書は、文学作品の読解を「ジェンダー研究」に当てはめただけ、という批判が起こり得るかもしれない。だが、そもそも、「文学研究」「文学研究者」という意識が解体されている時代に研究を開始した評者――ちなみに泉谷と私は年齢は一つ違い、大学院は(所属は違うが)同期――としては、敢えてその言葉を手放さない姿勢が、むしろ新鮮に感じられた。もっとも評者も、「越境」「学際的」という言葉のうさんくささには警戒心を持ってきた。なので、「文学研究者」になるという身構えは少しあるのだが、自分が「文学研究者」であるということへの拘りはあまりない。著者がどういった文脈の中でこのことをこれ程まで主張しなければならなかったのか、第一に聞いてみたい。また、「理論や注釈による過度な「武装」と、作家へのつかず離れずといった曖昧な向き合い方」が、「文学研究」として「中途半端」という感想もなかった。ただし、これも、私たちの世代――と敢えて言うが――では、「文学研究」とは何かという問いが、回避されて来たためかもしれない。「中途半端」かどうか判断するに足る「文学研究」の指針が評者にないのだと、己を顧みた。

だが、こと文学作品を読むという営みに関して、この書はその可能性を、著者の倫理的姿勢によってストップさせ、「中途半端」に留まっているように思う。著者に倣って「あえて挑発的に」言えば、「文学研究とジェンダー研究」の制度的な抗争に煩わされるのではなく、作品の過剰性や奔放な想像力、暴力性を引き受け、「愚直」に読み切る必要があるのではないか？その辺りを問題提起したい。

気になるのは、注釈的アプローチにしても、理論的アプローチにしても、私たちが生きる現実社会と、フィクションである

『フェンスレス』オンライン版 第7号(2024/01/20発行)
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

小説が、本書において極めてフラットに接続されていることである。このことが、絶えず作品を他の言説や資料体に着地させる行論を可能にしている。これは「日常性」という概念とも関係しているだろう。文学から私たちの「日常」を掬い上げようとする著者は、表現を自律的なものと見ず、現実社会と地続きにするのだ。

こうした姿勢は、第六章や第七書では、効果的なように思った。だが、社会反映論的な小説読解は、多和田葉子「犬婿入り」のような寓話的作品を現実的に読む態度（第四章）につながり、作品の奔放な想像力を読み落とす可能性があるだろう。あるいは、津村記久子「地下鉄の叙事詩」のような物語に書き込まれた暴力性とその潜勢力を無視し、現状を維持する小説として読む態度（第二章）につながりもする。

「日常性」をそっくりそのまま肯定しようとする本書の技法。それは、私たちが生きる現実社会自体を、どうすることもできないもの、揺らがないもの、仕方ないもの、動かしがたいものとして処し、結局のところ統治に与することに連なる怖れがある。この問題を詳らかにするために、ここでは、「本書の考察を叩き台に練り直してくれるような期待」をキャッチ（ミス）して、二つの小説を読み直してみたい。

二　「犬婿入り」の危うさを読む

第四章「教化される感覚――多和田葉子「犬婿入り」論――」は、「犬婿入り」（初出は「群像」一九九二・一二、本文引用は『犬婿入り』（一九九八・一〇、講談社文庫）による）を「郊外」「国立市」「犬婿伝承」「エイズ」などの文脈に接続させて読解する。注釈的アプローチによって着実に行論される本章は、だが、作品の危うい欲望を読もうとする態度に欠けている。たとえば同作において印象的な「尻舐めの動作」について、泉谷は「「北区」の常識を極めて具体的に相対化する表現」（165－166）と、穏当な評価をなす。また、小説における「糞便の問題」を扱う際も、以下のように述べられている。

糞便の問題一つ取っても、それぞれの家では親が赤ん坊のおむつを替え、その後始末をするという日常が繰り広げられているはずであり、それらは核家族を形成する際に最低限引き受けざるを得ない「性」と「汚物」の残滓と呼べる。完全に排除することの不可能なこうした事実と感触を、しかし「北区」の常識は人々の脳裏から忘却させていく。このことを可能にする土地の記憶や制度は、「団地」という形態の家に居住しない独り身の女性の営為に寄り添うことで、改めて可視化されたのではないだろうか。また、そればかりか「犬婿」の舌――親密性やケア行為を伴わない、生活スタイルを共にするだけの二者間での性行為――は、不道徳とされる「性」を排除することで成立した主体

に罅を入れ、新たな境界線を引く可能性に満ちているのである。（176）

現実社会における「北区」的規範を「相対化」する作品として「犬婿入り」は読まれようとする。そのとき、規範から外れた存在に「寄り添う」文学作品は、私たちの現実社会に不意打ちを与えると言う。これは、泉谷のみでなく近年よく見られる倫理的な研究態度だ。すなわち〈文学作品を読むこと＝「他者性」を感知すること〉という図式である。このような考え方が、いま・ここ――「他者性」もへったくれもない、半径5メートルしか考えられなくなったデジタル資本主義の爛熟期――において重要であることは理解できる。根こそぎぶっこ抜かれた想像力を呼び起こすことは人文学教育において喫緊の課題だと思うし、自分とは異なる存在を想像しようとすることは文学を読むことの一つの始まりである、という旨は、大学の授業などで評者もよく話す。

だが、こうした姿勢による読解は、わたしたちの「現実社会」を撹乱する文学作品として、「犬婿入り」を飼い慣らすことになるのではないか？　別様に言えば、「犬婿入り」の危なさ-暴力性-「革命的」様式は、本書が考えようとする「有用性」（321）に収まりきらない力を持つのではないか？

まず、押さえておくべきは、同作が「糞便」「尻」「異類婚姻譚」という要素に溢れたカーニヴァル的世界を描いていることである。そうした文学的想像力を引き受け、リアリズムとは異なる論理が駆動している作品として読む姿勢が必要だろう。なかでもとりわけ重要なのは、「犬婿入り」は犬になる小説であるということだ。本作において太郎は「乳房というものに全く愛着がなく、みつこの乳房を触ったことがなく、接吻ということにも興味がなく、吸う時には、みつこの首筋を吸血鬼のように吸」い、みつこは「鏡を覗き込むと、自分の顔が赤く腫れ上がり、鼻もまるくなってきていて、唇は乾き、こんなに醜い自分の顔を見るのは生まれて初めてだと気づ」く。まずもって太郎が、そして彼との関係を通してみつこも、人間ならざるものに変身する。

殊に太郎の性的な放縦さ、彼の乱痴気騒ぎが、この変成と関わっている。夕方以降は常にみつこと交わりたがる彼のセクシュアリティは、以下の性行の場面からわかるように、「文字通り〈人並み〉ではな」い、けものじみた犬並みなものとして描かれる。

> […]みつこの顔は次第にあおざめてきて、それからしばらくすると、今度は急に赤くなって、額に、汗が吹きだし、ねばついてきて、膣に、つるんと滑り込んできた、何か植物的なしなやかさと無頓着さを兼ね備えたモノに、はっとして、あわてて逃れようとして、からだをくねらせると、男は、みつこのからだをひっくりかえして、両方の腿を、

大きな手のひらで、難無く摑んで、高く持ち上げ、空中に浮いたようになった肛門を、ペロンペロンと、舐め始めた。

さらに、彼の性的関係は、みつことの間に取り交わされるのみに留まらない。仕事をせず、良子の元から離れ、みつこと関係を持ちながら、終盤ではゲイバーにも通っているらしいことが明らかにされる。犬になる人物として描かれる彼の奔放なセクシュアリティは、作品のカーニヴァル性を加速させている。

だが、このような太郎が、折田から発せられる「エイズなども心配」という言葉によって、一九九二年＝世界的なエイズ・パニックのただなかに置かれることで、この作品は途端に危うくなる。なぜなら、糞便-尻-ゲイバー-アナル・セックス（「〈腰を振っている〉という噂」）-性的な放縦さ-相手の複数性といった作品におけるイメージの連関は、そっくりそのまま、エイズをスティグマ化し排除しようとする当時の趨勢と重なるからである。田崎英明はサイモン・ワトニーの言葉を踏まえ、「ゲイのアイデンティティ、ゲイ・コミュニティの基本」を「プリューラリズム――複数主義・多数主義・多元主義――」とする。「相手の多数性」――「一ぺんに多数という場合」も「とっかえひっかえという場合」も「やり方の多数性」の場合もある――が「ゲイの経験の基本」である。だが、「それはしかし世の中では乱交と言われ」、「ゲイの性行動は激しいし、相手もとっかえひっかえするし、何度もセックスするという、そういう激しさこそがエイズの原因である、あるいはゲイ・コミュニティがエイズを流行させた原因であるみたいな形で、否定的にとらえられていた」[1]。そうした状況下で、ＡＣＴ ＵＰに代表されるエイズ・アクティビズムにおいて、たとえばダグラス・クリンプは、否定的なイメージで記される「乱交」を多様な快楽の技法として肯定的に語り直している。[2]それはむろん、安易な性の解放を唱うものではなく、ゲイ・アイデンティティとしての「複数性」を手放さずにエイズ・パニックを生き延びようとする、死と隣り合わせた「運動」としての言葉である。

そこから翻って「犬婿入り」を考えると、上記の切迫した言葉と作品とは一見無縁だ。むしろ本作は、太郎を「ゲイの性行動は激しい」というステレオタイプに重ね書きして――あるいは、女性であるみつことも関係を結ぶことで「相手もとっかえひっかえ」という節操なさ、性欲の奔放さを過剰に表して――しまっているだろう。

現実社会では、こうしたステレオタイプによって、男性同性愛者たちはエイズ感染のリスク・グループとして処され、「排除すべき潜在的加害者」[3]としてうち捨てられてきたし、それは世界中で起こっていた。そうした文脈の中で、人であって人ならざるもの＝犬として太郎が描かれることは、非常に危ういと言わざるを得ない。すなわちそれは、エイズ・パニックにおける最悪のホモフォビアの中で、人権も尊厳も軽視され死んでもいいものとして処された同性愛者イメージを、再生産し得るか

らである。泉谷は「小説では折田さんが危惧を露わにするだけであって、太郎と「エイズ」を直接的に接続するような形跡は何も示されない」とし、太郎が「「ゲイ」と「エイズ」という極めて安直に連鎖するイメージへ押し込められてしまう」ことの「北区」的力学を問題化する（171）が、「極めて安直に連鎖するイメージ」は、こうした危ない形で、作品に確かに書き込まれている。

だが、厄介なことに、その危うい表象＝犬になる太郎に、あるいは太郎と関係することで犬になるみつこに、家族イデオロギーを突破する逃走線を見出すことも、また可能だ。すなわちドゥルーズ＝ガタリの「動物への生成変化」の問題である。二人が『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』で撃ったのが、オイディプス的家族モデルであり、資本主義の社会制度から精神分析までも浸透する父‐母‐子という血縁モデルであった。彼等は「動物への生成変化」に家族・宗教・国家からの逃走線の可能性を描出する[4]（ただし、「逃走線は行き詰まり、一匹のむく犬のようなオイディプス的家族動物になりさがる」[5]こと、すなわち生成変化は飼い犬に留まってしまうこともあるのだが）。

さらに、『アンチ・オイディプス』から影響を受けた一九七〇年代のアルゼンチン‐フランスの同性愛解放運動の姿勢を、太郎の存在様式と重ね合わせることも可能かもしれない。廣瀬純が次に述べるように、それらの運動の中で同性愛者は資本主義社会を支える家族工場を撃つ「革命的」な生を生きていた。

資本主義社会に固有の性的規範を内面化しそれに則って自分のリビドーを自分で管理できる人間存在が家族工場によって再生産され続け、これに伴ってまた、家族工場それ自体が再生産され続けることなしには、資本主義社会は一瞬たりとも維持され得ない。資本主義システムの「基底」をなすセクシュアリティのこのマネジメントを、「性と革命」［一九七三年発行］の著者たち［アルゼンチンの同性愛者解放戦線（ＦＬＨ）］は、身体の諸器官へのリビドーの配分としても描き出す。問題の共有のみならず分析の水準でも同テクストが『アンチ・オイディプス』に接近するのはこの局面においてのことだ。「リビドー（セクシュアリティ）に対する支配は、リビドーを身体の特定部分に還元することによってその頂点に達する。生殖器への還元である。性的享楽をもたらす力は実際には身体全体に及んでいるが、支配社会は、身体のできるだけ多くのゾーンを労働に割り当てることを必要としている。こうした生殖化によって身体は、快楽を再生産する機能を奪われ、疎外された生産に用いられる道具に転じられ、［階級社会の］再生産に必要不可欠な部分だけがセクシュアリティに残される。そのため、システムは、ペニスをヴァギナに挿入するという形態以外のすべての性的活動を〝倒錯〟または〝病的逸脱〟などと呼び、特別な厳格さを以ってそれらを断罪

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

する」。[6]

〔ヘテロ〕セクシズムが、セックスを、生殖を目的とする性器の挿入としてしか認めない中で、同性愛者達が実践する快楽の多形性こそが、「革命的になること」の様式として見出されていた。これは後のエイズ・アクティビズムにも連なる流れである。[7]

「犬婿入り」において、みつことも交わり、ゲイバーにも通っているらしい太郎は「プリューラリズム」を体現するが、それは相手の複数性の問題だけではない。彼は「尻舐め」をし、「みつこのからだのニオイを嗅ぐこと」を「唯一の趣味」としており、すなわち快楽の多形性を実践してもいる。そうした乱痴気騒ぎのカーニヴァルの中で生きる太郎は、婚姻関係から逃れ、みつことも、（おそらく）男たちとも関係を結び、松原利夫と旅にでる。一方、太郎と関係することで自身も犬になるみつこは、松原利夫の娘の扶希子とともに、血縁関係から逃れて生きることを選ぶ。カーニヴァル世界は、家族とは異なる連なりを生きる者たちを創発するのである。ならば、エイズのステレオタイプを過剰に強化してしまう作品の危うさは、家族工場のフローを断ち切り逃れていく二人の「革命的」な生き方の危うい可能性と、表裏一体となっていると言えよう。

もちろん、以上のことを、〈性「革命」＝諸規範からの「解放」〉として手放しに称賛することはできない。[8]だが、文学作品は非常に厄介なことに、奔放な想像力によって、時に倫理を嘲笑い、暴力的に、新たな存在様式を描き出す。その表象を読まずに、異性愛規範の「相対化」に資するものとして作品を定位するのは、「犬婿入り」を私たちの「日常」を住みやすいものにしてくれる飼い犬のように手懐けることとなっているのではないか？　犬＝けものとして「犬婿入り」を「愚直」に読み、その厄介さに向き合い、危うい逃走線の行き着く先を考える必要があるのではないか？

三　「地下鉄の叙事詩」の潜勢力を読む

第二章「暴力からの脱出／他者への接近――津村記久子「地下鉄の叙事詩」論――」は、「地下鉄の叙事詩」（『アレグリアとは仕事はできない』（二〇〇八・一二、筑摩書房）に書き下し、本文引用は同書による）を「新自由主義」「鉄道（地下鉄）」「痴漢」「女性専用車両」などの問題の中で読解する。ここでも、現実社会における諸事象と作品が地続きにつなげられて行論がなされている。本作が四人の登場人物の自意識の流れをリアリズム的手法で記した物語であること、そして、現実に許されるべきではない「性暴力」＝痴漢の問題が記されていることと、この読解方法は関係するだろう。

「「骨が砕けて肉が千切れるまで、ぶちのめしてやる」というシノハラの怒りは、大袈裟なものではない」（106）、「電車から

降りる＝暴力的な状況を丸ごと拒否するという極めて単純なシノハラの選択が、学校に行かないことへ結びつく発想は、決して極端なものではない」(108)と、泉谷はシノハラに寄り添う。小説で描かれる痴漢は絵空事ではなく、被害者の心身を深く傷つけ、人間の尊厳を否定する。現実社会でこのことがずっと喫緊の問題であり続けているという点において、泉谷の論考はもちろん重要だ。

だが、文学作品を現実的に読もうとする行論は、回り回って結局のところ「日常性」を維持することに行き着くのではないか。最も私が違和感を覚えたのは結論である。

つまり、市場や労働を基盤とした公共空間に存在しながらも／しているからこそ、「匿名性」を保持したまま瞬間的な「親密性」を摑み取るような実践が、津村の作品では遂行されている。そして、それは今まさに隠蔽されかねない「他者」の経験に接近し、暴力に抗するための回路を切り開く力にじゅうぶんなり得るだろう。私的領域においてしか萌芽しないと想定される「親密性」が、公共空間において突発的に出現する可能性――そこに固有の価値を創出する営みは、二〇〇八年という新自由主義の矛盾が渦巻く時期におけるきわめて重要な分岐点として読み替えられる必要があったのである。(112)

痴漢にあったシノハラが犯人を線路に突き落とそうとしたのを、偶然ニノミヤが犯人のジャンパーを摑む。そこに、自身も過去から痴漢の被害にあい、シノハラが痴漢されていることに気づいていたミカミが取り押さえる。こうした物語の結末を、泉谷は「今まさに隠蔽されかねない「他者」の経験に接近し、暴力に抗するための回路を切り開く力」として措定しようとする。だが、作品の論理から言えば、シノハラとミカミは痴漢被害者という共通性がありその時点で「他者」であって「他者」ではなく、一方ニノミヤ自身は痴漢のことに何も気づいておらず、その点では「「他者」の経験」も何もない。犯人を殺す寸前でそれをたまたま逃れた、という結末は、この観点からするとご都合主義的ハッピーエンドにも見えてくるのだが、泉谷はこれをオルタナティブとして摑み出そうとする。

新自由主義の過酷な現実を記しながら、泉谷が導出する右の結論。それは、だが、結局の所、「瞬間的な「親密性」」という偶然＝出来事の到来を人々がひたすら待機することに終わるのではないか？　敢えて強く言えば、〈「日常」にもいいことはあるから新自由主義を生き延びなさい〉という形で、現実を追認したり、維持したりする態度に結びつく危険性がないか？　その意味で、「瞬間的な「親密性」」を「日常」から見つけ出そうとする構えは、「資本主義リアリズム」(9)の一種の変奏になり得るだろう。その筋道は、何でもない「日常」をきらきらとしたものに描き変える「日常系」作品群の保守性とつながるように

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

も思える（こうした感想は、第八章などでも浮かんだ）。

ところで泉谷は「叙事詩」というタイトルを持つ小説から「匿名性」を言祝ぐのだが、ミハイル・バフチンは「叙事詩」が対象とするものを「民族の英雄的な過去」「民族の歴史の〈始源〉にして〈頂点〉である世界」とした。[10] 津村は、満員電車における痴漢＝性暴力への抵抗、という人々の記憶に残らない――歴史的事件には普通ならない――事件こそを、「叙事詩」＝「英雄的」な出来事とする。これを文字通りに受け取れば、痴漢に対する抵抗意識を持っていたミカミこそが、あるいは未遂だったとしても痴漢の犯人を線路に突き落とそうと試みたシノハラこそが、「英雄」であると読みたくなる。二人の「女性」の性暴力被害という経験を介した連帯（シスターフッド）の物語として解することは、作品の言葉からあり得るルートだとも思うのだが、泉谷はそれを避ける。

> また、この結末から窺えるように本作で達成されるものは、人々の意識的な抵抗による「連帯」や「共闘」とは呼べない。それはむしろ人々の偶発的なすれ違いや交差によって生み出された結果であり、「その場限り」の繋がりに近い。しかし、そのような軽さを伴う交差こそが、強迫的な連帯感を回避できる側面を持つとも言える。（110－111）

「連帯」に対する忌避感がどうやら泉谷にはあるのだが、[11] なぜ「連帯」を読まないのか、単純に聞いてみたく思った。ジェンダー／セクシュアリティ研究の状況や、運動としてのフェミニズムとの距離が、そこには関わっているのだろうか。

しかし評者は、作品を「愚直」に読み、敢えて「連帯」の物語を読むことも、重要だと思う。それは、痴漢に遭っているシノハラに対してミカミが「彼女の背中の不快な熱さを思うと、ミカミの腕には鳥肌が立つ。吐き気すら催す。」とし、「どうやって男に対して、見えているぞ、と牽制しようかと思案」するように、二人の痴漢経験者の見えないつながりが、作品の最後を用意するから、ということももちろんある。だがそれだけではない。作品のそこここに埋め込まれている「連帯」への欲望は、無視できないと思うのだ。

たとえばミカミは「人を殺したくなることがある」と、同じ地下鉄乗客に対して過剰な程の暴力衝動を持つ。が、一方で彼女は「先ほどまで同じ電車に乗ってどこかに向かわされていた人々とは、少なくとも十数分間同じ極限に近い環境に置かれるのに、どうして労わりあうことができないのだろうかと考える。」と、そうした人々と連なる回路を求めてもいる。ただ、勤務時間外も24時間7日間常に既に「仕事」に絡め取られ、「仕事」外の時間に互いに言葉を交わし合うような〝プロレタリアの夜〟がとうに奪われた、ポスト・フォーディズムを生きる労働者である彼女は、そうした考えを持続させられない。すなわち「連帯」は、未発のまま・バラバラのままに留まっていた。

また、ニノミヤも、同じ地下鉄乗客に話しかけたくなりながら、「自分達には隔たりもある」と感じ「人が近くにいて当たり前、という環境に、電車の中の人々は隔てられている……」と思う。自己責任を前提に社会を生き延びねばならない彼は、将来への不安から睡眠不足に陥り「カフェイン漬け」となっている。「インターネットの就職サイト」によって収入の不安を煽られ――デジタル資本主義の市場に捕獲され――、それをグローバルなスポーツ産業＝「リーガ・エスパニョーラのライブ中継」によってやり過ごそうとするこの労働者は、やはり「連帯」への欲望を持ちながら、孤立した原子（アトム）に留まっている。そしてそのことは、暴力衝動として発露する（「席取り女に無性に話しかけたくなるが、自分よりずっと恵まれていたりしたら悲しくなりそうなので、もちろん訊きはしない。叱り飛ばしかねない。あんたおれより金持ってんだったら電車の席ぐらい譲れってんだ！」）。

バラバラに分断され、互いに暴力衝動を向けあう、地下鉄乗客たちのにっちもさっちもいかない「日常」＝新自由主義の情勢のただなかで、だがしかしこれが「叙事詩」たるのは、やはりミカミが「連帯」を手放さなかったからだろう。

> お金を払って電車に乗っているのに、そこで痴漢に遭ったり、誰かが事故を引き起こして電車を遅らせたり、時には鉄道会社自らが、利益のために捌ききれない無理なダイヤを組んで災厄に飛び込んでいったりする。ミカミはぞっとする。そんな中であっても、勤め人は職場に向かい、学生や生徒は学校に行く。得た金の十数パーセントを定期代につぎこむ。移動には純粋にリスクが伴うものなのかもしれない。そうとはいっても、自分たちは何なのだろう。暑苦しい箱に詰め込まれ、その中でひどくいがみ合い、お互いへの無関心に乗じて薄汚い欲望を満たす連中が、閉まったドアの隙間から滲み出す膿のように入り込んでくる。／男を尾行しよう、とミカミは決める。

互いに「いがみ合い」「無関心」なまま「痴漢」を跋扈させている、バラバラにさせられてしまっている、それでいてお人好しにお金まで払っている「自分たち」って一体「何なのだろう」？　そうした問いは、怒りや暴力衝動を抱え込みながらミカミ自身が抵抗的な主体となるプロセスへと至らしめる、のみならず、「自分たち」を異なるものへと組み替えようとする運動の端緒なのであり、その問いこそが新たな「自分たち」を構成する。そこから、ミカミは男を尾行する。まさに「英雄的な過去」が描かれようとしている。

だが、もちろん、「地下鉄の叙事詩」はミカミという一人の「英雄」の誕生を言祝ぐ物語ではない。たとえミカミの生成変化がそれらを束ねる契機だったのだとしても、連なることへの欲望は乗客たちの胸中に流れていたのだ。作品の論理は――たまたま「痴漢」の死を回避させただけのニノミヤに、たとえそ

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

の自覚が全く欠けていたとしても――乗客たちが連なり合う必然性を持つ。そしてそこではミカミ一人が「英雄」なのではなく、彼女は、たまたま地下鉄に居合わせただけの有象無象の欲望が束ねられる‐新たな「自分たち」が生じるような、そんな特異点であるはずだ。[12]

作品には、暴力衝動を「連帯」への欲望へと組み替える回路が、ひそやかだが着実に描かれており、それは労働者を分断させる情勢に対して、抵抗への潜勢力としても措定できるものである。だが、本章のタイトルからも分かるように、泉谷は「暴力からの脱出／他者への接近」こそを可能性とする。ここには、〈暴力はいけない〉という今日的に正しい前提があると思われるのだが、性暴力の問題と、各登場人物が抱く暴力的な衝動の問題を、一緒くたに回避すべきものとして処してしまっていいのだろうか？　別様に問えば、暴力の潜勢力を抱え込んだまま他者との回路を模索することは、いけないことなのか？

地下鉄の乗客たちが、暴力衝動を組み替えて「連帯」し、自分たちの状況を変える姿を、非常に厄介なことに、作品は記してしまっている。その連なりを「偶発的」なものとすることは、地下鉄乗客たちに抱え込まれた潜勢力を骨抜きにする――乗客たちが己の内から「連帯」を創発する力を地下に埋もれさせたまま、人々に出来事を待機させる――こととなり、かえって新自由主義的統治に与することになるだろう。

四　まとめ

繰り返せば、本書においては、新自由主義におけるサバイブの技法が、文学作品から案出されている。だが、ここまで二作品を読みながら問題化したことは、上記の技法の指針となっている他者への倫理的姿勢――「相対化」「寄り添う」「他者の経験に接近」――が、文学作品を読むときに、何を置き去りにするかということである。その倫理は一見正しいが、私たちを丸め込み、現実を追認する言葉にもなり得る。そこからピックアップ可能な要素のみを前景化する正しい読解に足りないのは、倫理的には厄介でノイジーな快楽や欲望を、「愚直」に読む姿勢である。文学作品中にまどろんでいる、過剰で暴力的で奔放な「革命的」様式の在り方を読むことが、忘れ去られているのではないか。

このような構えは、昨今の倫理的規範からしたら馬鹿げているのかもしれない。だが、私たちは、倫理的規範と新たな統治の共犯関係から脱すべく、愚かに「愚直」に読まなければならないのではないか。

注

（1）田崎英明×村山敏勝「エイズをめぐる6つのキイワード」（田崎英明編『エイズなんてこわくない　エイズ／ゲイ・アクティヴィズムとはなにか？』一九九三・一一、河出書房新社）。

（2）「ゲイ・ピープルはエイズが蔓延する以前から、セックスは挿入だけに限られるものではないことを知っていたから、セーフ・セックスを発明することができたのだ。われわれの乱交は性の快楽だけでなく、快楽の多様さについても多くを教えてくれた」（ダグラス・クリンプ「エイズの時代にいかに乱交を続けるか」、竹村和子訳、原著一九八七、注（1）と同書に載録）。

（3）「なぜならば［＝対象をゲイ・コミュニティに特定したＨＩＶ予防キャンペーンに厚生省が乗り気でなかったのは］、「ゲイの男たちはゲイだからＨＩＶに感染する」のであって、「ゲイであり続ける限りは感染は当然」だから「予防などやるだけ無駄」なのだ。もっと言えば「男性同性愛者たちはエイズそのもの」であり、「守るべき被害者ではない」ばかりか、むしろ（未感染の《異性愛者》たちにとっては）「排除すべき潜在的加害者」なのである」（キース・ヴィンセント＋風間孝＋河口和也「同性愛と死――エイズによる古い話の回帰」、『ゲイ・スタディーズ』一九九七・六、青土社）。

（4）「生成変化の政治学は、家族のものとも、宗教や国家のものとも異なる具体的なアレンジメントのなかで入念に作りあげられるのだ。こうしたアレンジメントが表現しているのは、どちらかというとマイナー性の集団である」（ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ「一七三〇年――強度になること、動物になること、知覚しえぬものになること……」、『千のプラトー　中　資本主義と分裂症』宇野邦一他訳、原著一九八〇、二〇一〇・一〇、河出書房新社）。

（5）注（4）に同じ。

（6）廣瀬純「「同性愛者こそが最も革命的であり得る」――ドゥルーズ＝ガタリ／ＦＬＨ／ペルロンゲル」（鹿野祐嗣編『ドゥルーズと革命の思想』二〇二二・一、以文社）。

（7）『アンチ・オイディプス』から触発され記されたギィー・オッカンガム『ホモセクシュアルな欲望』（関修訳、原著一九七二、一九九三・一〇、学陽書房）も参照されたい。なお、フランスの「同性愛者革命行動戦線」を組織した一人であるオッカンガムは、一九八八年にエイズによって亡くなっている。

（8）この点についてはデイヴィッド・Ｍ・ハルプリン『聖フーコー　ゲイの聖人伝に向けて』（村山敏勝訳、原著一九九五、一九九七・五、太田出版）などを参照。

（9）マーク・フィッシャー『資本主義リアリズム』（セバスチャン・ブロイ　河南瑠莉訳、原著二〇〇九、二〇一八・二、堀之内出版）を参照。

（10）ミハイル・バフチン「叙事詩と長篇小説」（『叙事詩と小説――ミハイル・バフチン著作集⑦』川端香男里　伊藤一郎　佐々木寛訳、原著一九七〇、一九八二・二、新時代社）。北岡誠司『バフチン――対話とカーニヴァル』（一九九八・一〇、講談社）も参照し、引用部についてはこちらの訳（147頁）を用いた。

（11）本書のこの点を飯田祐子「小説が可視化しようとする女性の困難に気付けるか」（『図書新聞』二〇二一・一一・六）は以下のように評価している。「先行する女性文学研究に珍しくない「連帯」

『フェンスレス』オンライン版 第7号（2024/01/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

の発見にも本書は慎重である。女性文学作品に対する本書の応答の誠実さは、共感やエンパワメントなどの向日的で安心の得られる言葉に寄りかかることを徹底して避け、小説が可視化しようとする私たちの社会における女性の困難に、どこまで気付くことができるのかと自らを試し続けるような真摯な読みの姿勢にある」。

(12) 合評会における本節の読解を基に「地下鉄乗客階級のひそやかな構成――津村記久子「地下鉄の叙事詩」を読む――」(web雑誌「ＭＦＥ　多焦点拡張」二〇二三・三)を記した。本作についてはこちらでより詳しく論じているので、以下を参照されたい。
https://drive.google.com/file/d/191BkGaB06-w76kiWE1Mrkpmr9pvSb55Q/view

作品について考える機会を与えてくれた合評会と本書に、改めて感謝申し上げます。

〈付記〉引用・参考資料の傍点、ルビは適宜省略した。引用文中の傍線、[…](省略)、／(改行)は稿者による。